

## 最終報告書

—インド北東州で見たアイデンティティのかたち—

カッティング星楽アン

独立の機会を逃したのだとを感じるエスニック集団が、世界にどれほどいるか知れない。だが、一つ確かなのは、インドの北東部という多様な部族の生活する地域でも、そのような思いを抱えて生きる人たちがいるということである。

「僕たちは独立というバスに乗り損ねたのだ」という声は、メガラヤで拾ったものだ。インド北東部の人々は、モンゴロイド系の外見を持ち、キリスト教徒が多く、さらに部族ごとに固有の言語を話す。そのため、インド・ヨーロッパ系でヒンドゥー教徒の多いインド亜大陸側の人々とは、外見、文化、言語のいずれにおいても大きく異なっている。こうした人々がインドという国家に組み込まれていった経緯は、先ほどの人物が示唆したように、インド独立後の複雑な政治過程の中で国家形成が実現しなかった結果であった、と解釈することができる。

では、彼らに待ち受けていたのは、望まぬ国家のもとでエスニシティを守るための戦いなのか。それとも、平和のための同化なのか。私はこの度インド北東部へのスタディツアーに行かせてもらえることになり、インド北東部の人々の、アイデンティティと平和への考え方について確認したいと思っていた。

### [渡航前の問題意識]

出国にあたり事前レポートを書く機会をいただいた私は、自身の関心を整理するかたちで、平和と民族的アイデンティティの関係についての疑問を次のように綴った。平和を単に「流血のない状態」と定義するならば、民族的アイデンティティを強く維持するために政府に武力で対抗する行為は、非平和的なものとみなされることになる。しかし、そのように考えると、平和の実現のためには同化やアイデンティティへの妥協が求められることになりかねない。むしろ、平和をより広い意味で捉えるならば、多様なアイデンティティが共存できる状況こそが、その条件として適切なのではないか。

当時私の頭の中にあったのは、北東部の一部州の葛藤への想像である。インド政府から独立するためにナガランドが繰り広げてきた、アジア最長と言われる、暴力・非暴力から成る独立運動。中国との国境問題を抱えるアルナーチャル・プラデーシュにインド政府が積極的に介入していく様子。インドの東方外交強化を目指すルック・イースト政策や、それをさらに積極的な地域協力の枠組みへと発展させるアクト・イースト政策。

違いを多数抱えたまま望まぬ国家に組み込まれた人々の行く末を憂いながらも、彼らがおそらく持ち続けているであろう力強さに、私はどこか幻想を抱いていた。とはいえ、一応それらは、北東部の人々が経験してきた争いや差別について、文献やニュース、さらに

は聞き取りなどを通じて行った予習によって、ある程度裏付けられていた認識でもあった。

#### [現地経験が示した前提の誤り]

しかし現地に身を置くと、事前の予習によって形作られていた前提や想像の間違いと向き合うこととなる。「北東インドのことをどのように認識しているのか」と、アルナーチャル・プラデーシュ州、ラジヴ・ガンディ大学の学生であるオンジュさんは私たちに聞いた。日本に訪れた経験もある彼女は、私たちの答えに予想がついていたようだった。インド北東部は、多様な部族がいて、それゆえに争いもあって、今なお平和が必要なところもある地域である。その見方を受け入れてくれたうえで、そこについてだけで知ってほしくないという思いを打ち明けてくれた。インド北東部のより多くの側面、そこにある多様性、そして共存の実現について知ってほしいとのことだった。実際、インド北東部での滞在は、その言葉の通りの経験となったと言わざるを得ない。出国前に私が抱いていた疑問にも、前提の誤りが大きく二つ含まれていたのである。

私が現地で気づかされた一つ目の前提の誤りは、インド中央政府と北東州の人々の関係を、私が過度に対立的なものとして想像していたことである。渡航前の私は、北東州の人々について、国家との対立も辞さないような思いを民族性の維持に抱いているのではないかと考えていた。しかし、現地で各州の学生たちの声に耳を傾けると、そこにある不満の本質は、私の想像とは異なるものであった。彼らが語る、扱いが対等でないことへの憤りや、人種を理由に受ける差別への嘆きは、独立や自治への情熱には別段直結していなかった。むしろ、彼らの願望はインドという国家の枠組み内における立場の向上にあると述べるのが適切なようであった。

実際、各州政府も、アジア・コンフルエンスのような組織も、地域固有のリソースを活かした自律的な発展を模索してはいた。しかし、税収基盤を持たず、教育制度までもが中央の策定した枠組みに完全に依存している各州の現状では、誰が何を為すにも中央政府との連携が不可欠な条件のように見えた。依存関係は、個人のキャリア形成というミクロな視点で見ればより鮮明になる。現地において政府職は、収入面でも名声面でも極めて高く評価されており、優秀な人材の多くは中央政府との接点を持つ道を選択するとのことだった。

そうなると、インド中央政府のコントロール下に置かれていることに不平を漏らすことはできても、そのコントロールから完全に外れることを望み、そのためにあえて戦うという選択は、北東州の人々にとって現実的な選択肢ではないのかもしれない。「モディーは北東部をアクセサリーだと思っている」と言う、メガラヤ州のセント・アンソニーズ大学の学生の言葉には、印象的な怒りが込められていた。彼は確かにモディー政権に憤っていたが、より良い扱いを求めるその憤りは、すでにその国の一部としての意識がある状況を示唆するようなものであった。

もう一つの誤解は、民族的アイデンティティの在り方に対する私の理解である。事前レ

ポートにて平和の定義は自明ではないと書いた私は、その対抗軸であるはずのアイデンティティについて一切定義していなかった。渡航前の私は、安直に、民族的アイデンティティは国家との対立も覚悟のうえで強固に維持される主体的な理念として、何の捻りもなく存在していると考えていた。しかし、インドの中央政府と北東州の人々の関係や、部族民のアイデンティティの在りどころ、それぞれの伝統保護の現状を現地で見ると、私はアイデンティティが本来、相対的に構築される可変性の多いものであるということと向き合うことになった。

そしてこれらを踏まえて、新たな考察も生まれた。北東州の人々が守ろうとしているものは、民族的アイデンティティそのものというよりも、そこに結びつく尊厳や自尊心に近いものなのではないかとも思い始めたのだ。なぜなら、人々は与えられた構造の中で価値観やアイデンティティを形成し直すことによって、自分たちに残された尊厳を守っているように見えたからである。

私たちが訪れたのは、メガラヤ、アルナーチャル・プラデーシュ、ナガランドの三州である。それぞれの場所で目にした状況は異なっていたが、いずれも、出国前に私が抱いていた前提が必ずしも現実を正確に捉えていなかったことを示すものであったので、順に追っていききたい。

#### [メガラヤ州：土地に預けられるアイデンティティ]

まず初めに訪れたメガラヤ州は、カシ族の受け継いでいる母系社会や、盛んな学生運動、観光客の集まる自然環境で知られている。だが私には、メガラヤの人々の土地への想いが最も印象的であった。彼らは、同部族であっても、自分達の村の者でないか、村の者と結婚していない限り、よそ者の土地所有を受け入れ難く思い、禁じていた。

ある村のイム（王）を訪ねた際、一緒にいた学生活動家達は移民を一番の懸念材料とし、部族の土地をよそ者が保有することへの対策や、雇用を明け渡さないために、政府に働きかけていると熱心に話していた。また、州都シロンのセント・アンソニーズ大学の学生達は、都市部はまだしも、部族の土地に、インドの他の州やバングラデシュ等外国からの移民が来ることには、民族性保護のための不安があると語っていた。興味をかられ、方々で土地について質問を重ねていく中で耳にした概念が、「Land is identity（土地はアイデンティティである）」であった。それは、自分達が生まれ育ち、先祖代々受け継いできた土地がそれほど大切なのだと強調したい想いが伝わってくる表現であり、印象的な一言だった。

だが、本来セルフガバナンスという政治的権利の問題であるはずの「土地」が、なぜ真っ先に「アイデンティティ」として語られるのだろうか。この考え方を知って以降、ほかの州でも「このような土地観をどう思うか」と尋ねてみたが、その際も同様に肯定的な反応が示された。よって、メガラヤで巡り合ったこの帰属意識の形態は、私が北東州を考察するうえで重要な要素の一つとして浮かび上がった。

これはあくまで個人の意見であるが、状況を私なりに解釈してみたところ、そこには土

地そのものへの愛着以上に、土地を脅かされることへの切実な懸念があるように思われた。要するに、中央政府という巨大な構造の中で、北東部の人々が主体的に守りうるものが限られていて、いまや土地や職業といった限られた領域にとどまっているのかもしれない、ということである。

その意味で、土地とは民族意識の本質そのものというよりも、失われうるものの象徴として前面に現れているのではないだろうか。仮に土地でなかったとしても、残された別の何かと同様にアイデンティティと結びつけられていた可能性もある。そこに見えるのは、アイデンティティの本質性というよりも、むしろその相対性と受動性である。

#### [アルナーチャル・プラデーシュ：共生が形作るアイデンティティ]

メガラヤ州を立ち、次に訪れたのがアルナーチャル・プラデーシュ州である。この地域は中国との国境問題を抱えており、インド政府の関与が比較的強く現れる場所としても知られている。国家と民族の緊張関係が顕著に表れているか、静かな不満が蓄積しているのか、あるいは、インド国家への同化が着実に進んでいる光景が見られるのではないかと、私は予想していた。しかし、アルナーチャル・プラデーシュで目にした華やかな共生の姿は、私の予想し得ない奥行きを持っていた。

確かに、人々は自らを愛国的であると語り、ヒンディー語を自在に操る。また、メインランドの人々から同じインド人として認識されないことに深く傷つくという学生とも話し、インドの中央集権的な愛国教育に屈したのだろうかと思わされる側面もあった。インド北東部の人々は、あまり自分達をインド人であると言いたがらないためだ。

しかし、同州のラジヴ・ガンディー大学や日本語学校で私たち客人を迎えたのは、異なる部族のダンサーたちが州内の様々な部族のダンスを共に踊る姿であった。大学の学生たちと話しても、彼らは「各々の部族のアイデンティティを持つインド人」として自分達を説明し、多数ある部族間でも同族意識があり、州成立以降争いがないことを誇らしげに語っていた。そこには文化の死ではなく、むしろ公的な支援によって保護され、誇りをもって表現されている多文化共生の光景が広がっていた。

インド国民というアイデンティティを受け入れながら、部族としての誇りも保持する。この一見矛盾する在り方を、単なるアイデンティティの喪失や敗北と形容することに、私は大きなためらいを覚えた。アルナーチャル・プラデーシュをどういう側面で知ってほしいか、という質問に対する学生達の答えは「peace and brotherhood（平和と同胞意識）」であり、同州の平和の在り方は他州のロールモデルになれるかという質問の答えは迷いなしの「イエス」であった。もちろん、この規模での受容が可能なのは、中央政府から戦略的に重要視される存在として十分な援助を受けているからだという側面はあるだろう。しかし、反抗心を残す他州に比べて、この州の共生モデルが圧倒的に明るく、未来志向に見えたのは紛れもない事実であった。

#### [ナガランド：マルチリアリティの中でのアイデンティティ]

最後に訪れたのがナガランド州である。ナガランドは、インド政府からの独立を求める運動が長く続いてきた地域として知られており、出国前の私の頭の中にあつた北東インドの葛藤のイメージの多くも、この地域の抵抗の歴史に影響を受けたものであつた。

しかし、ナガランド大学の学生たちと話をすることで見えてきた状況は、私の想像よりも複雑なものであつた。学生たちに自分たちの部族や文化についてどのように学んできたのかを尋ねた際、彼らは必ずしも明確な答えを持っているわけではなかつた。学校で体系的に教えられているわけでもなく、家庭でも必ずしも強く意識されているわけではないようであり、「地域で」という答えがようやく出てくる場面もあつた。民族的アイデンティティが非常に強く意識されている地域という私の先入観に比べると、それはやや曖昧で、必ずしも一枚岩ではないように感じられた。

世代による認識の違いも見られるようであつた。四十代以降の世代には、エスニシティやアイデンティティの重要性を強く語る人が多い印象であつた一方、大学生世代になると、韓国や日本の文化を自然に受け入れ、インド文化に対して特別な敵対心を持っているわけではないという声も聞かれた。この状況を端的に説明してくれたのが、「ナガランドの人々は multi-reality、すなわち複数の現実の中で生きているのだ」という見解であつた。伝統的な部族社会、インド国家との関係、そしてグローバルな文化の影響という複数の現実が同時に存在する中で、各世代はそれぞれの立場を調整しながら生きているように見えたのである。

#### [結論]

出国前の私は、民族的アイデンティティへの妥協が平和の条件となり得るのかという問いを抱いていた。しかし、現地での経験を経た今、そもそもアイデンティティとは極めて相対的で、社会的状況の中で構築され続けるものであるという事実に向き合うことになつた。インド北東部においては、アイデンティティは国家と対立する政治的理念としてのみ存在するものではなく、外部の状況に応じて形を変えながら維持されていく側面も持っていた。与えられた構造の中で受動的に適応する道は、時に尊厳を傷つけられるものでもあつたかもしれない。それでもなお、血飛沫の上がる民族主義の闘争の代わりに、インドという国家の巨大な枠組みに組み込まれていく命運を受け入れ、土地や文化、言語等といった残された社会的資源を民族性の砦と捉えて自分達らしくあり続けようとする、人々の静かな選択の積み重ねが、私が目にしたインド北東部の人々の生き方だつた。

結びに、今回の派遣を通して私が強く感じたのは、日本において北東インドの独立運動や紛争の歴史に焦点が当てられることが多い一方で、現在の社会や若い世代の姿については十分に知られていないという点である。今後は、学生同士の交流を通じて北東インドに対する理解を更新し、相互のつながりを強めていくことが重要ではないかと考えている。その一つの試みとして、日本の学生と北東インドの学生との交流の機会や、これほどに違いの多いインド北東部の大学間でのプログラムを設けることも検討していきたい。